

禪について

東京大学教授 鎌田茂雄



昭和三三年四月、東京大学東洋文化研究所の助手になって以来、現在まで約三十年の間、華嚴教学と、中国・朝鮮仏教史の研究に没頭したため、専門道場で参禪する時間もないままに過してしまっただが、青年時代に学んだ禪についての思い出や、出会いを今も忘れることができない。

昭和二十年十月、敗戦によって虚脱状態に落ち入った私は、ある日、鎌倉の円覚寺を訪ねた。円覚寺の山内の白雲庵には、私の母の墓所があ

つたからである。母は昭和十二年にすでに亡くなっていた。湘南中学から東京陸軍幼年学校へ入った私は、休暇になると、よく白雲庵に墓参りに行ったものである。

白雲庵は円覚寺の塔頭たっちゅう寺院であり、開山は南宋の人で、中国の曹洞宗宏智派わんしの法系を受けた東明恵日とうみやうえにちであった。

円覚寺へ行って朝比奈宗源老師の講話を聞いたりするうちに、次第に禪に関心を抱くようになった。時には参禪のまねごとをしたりした。

円覚寺の僧堂は舍利殿の右側にある。臘ろう八接はつせつ心しん（十二月八日の釈尊の成道を記念し、十二月一日から八日の朝まで昼夜寝ずに坐禅する行事）の時など、坐禅堂の窓は全部開けられ、寒風が吹きすさぶ。じっと坐ついても全身が冷えきってくる。休憩時に出された甘酒の味を今も忘れることができない。

青年時代、不安定な精神生活をしていたとき、

私の前に大きく立ち上がったのが、駒沢大学の坐禅の教授であった沢木興道老師であった。

この沢木老師の坐禅の授業は私にとって唯一ただつの救いとなった。何によって生きようか、と思いつめていた私にとって、これは一条の光明であった。

沢木老師は私の顔を見ると、お前の顔には狐がついていると言われた。当時、私は気狂いのように坐禅をしたり、時には山の中で線香に火をつけ、暗闇の中で光りの一点を凝視しながら夜坐をしたりしていた。いわば禪病にかかっていたのであろう。

駒沢大学の坐禅堂で坐禅をしていたとき、いきなり老師が単からおりてこられ、私の背後に立たれ、私の肩をもつて、私の身体を床の上どころがしたことがあった。仕方がないので床の上で坐禅を続けたことがある。老師は私の背中に立ちのぼる野狐禪やこぜん（真実に大悟徹底もしない

のに、みだりに奇異な言行をなす者を見下げて、野狐にたとえる)の亡霊を見たにちがいない。

私と沢木老師との出会いは学生時代、坐禅の授業を受けたただけであり、個人的に師事したり、教えを受けたことはまったくない。ただの門外漢の一人であるにすぎないが、青年時代の私が確信し、今もその確信が微動だにもしないのは、沢木老師こそ真実の禪者であるということである。

沢木老師は「坐禅はあたかも、武士が三尺の

秋水を引き抜いて身構えていると同様に真剣な姿である。これ以上、真剣な姿勢はあり得ない。どんな人間でも、一ばん尊いのは、その人が真剣になったときの姿である」(酒井得元老師『沢木興道聞き書き』)と言われたが、禪とは、その人が真剣になってこの与えられた人生を生きぬくことなのである。私も還暦を迎えるにあたって、青年時代に学ばせて頂いた禅の生命を、氣持を新たにしてかみしめながら、合氣道の稽古と学問への精進に励みたいと念願している。

